



武道百集 前篇

代

^ 13
3370
2



止榮堂主人聞書

或人博識君子曰拾德

何言言や君子若曰拾德

立バ羽織如ク堅レバ衣如ク

如ニ如ジ十徳ト言武人陰ニ之ヲ

聞キ友人ニ語テ曰立バ羽織ニ

似タリ堅ト衣ニ似タリ似タリ

似タリテホイ是ヲ四タリ

武道白石英卷之貳

多木折々お別れは川あき事

附武多木折々お別れは川あき事

多木折々お別れは川あき事

さへあきくまを隠さむ徳母の

やうに隠れぬなりなすあんと

一は令別しととさあき

道と流るる水もともたんと



五十八九 寄 本大學出版部

どうく 休所殿の用事おどびー
しもりまふ社田をささていさざらる
其もまはは乃のうら工具屋とま
ちちう洋紙の紙さー
うやうれ力 富田と入る金
別枝は 法をすの 用は 休さる
枝さつと 秋田はささる
休所右幸々々 二十五年
家中は 武蔵屋と 津和野

名入りうと 奥刻とさう
の年 是よ 其の
そまうと 辰とさう
幸田とさうに 辰とさう
辰の 辰とさう
年ー 辰とさう
何さう 辰とさう
とふ 辰とさう

新地も村も一々修治のま
法もさう名もさうつゝも
とまゝとありさうな一々
うて人目もさうな一々の
政もさうとさうの姿もさう
修治も一々修治もさう
中もさうとさうの姿もさう
うてさうとさうの姿もさう

せうとさうの姿もさう
折もさうとさうの姿もさう
中もさうとさうの姿もさう
折もさうとさうの姿もさう
折もさうとさうの姿もさう
折もさうとさうの姿もさう
折もさうとさうの姿もさう
折もさうとさうの姿もさう

中く新入の者も多し
 婦人などひきつくとおそろふておな
 ぎさくもあつたはなをきかふと大石
 のてうは是とやらとておそろふてある
 中へ入るるにふつと文脈をわきま
 せしむるにふつと文脈をわきま
 せしむるにふつと文脈をわきま

とぞ挨拶をいへてそのまゝに
 返すやハ急角張るを定むとい
 うはさういふ意であらう——
 あつたかきと妻女と討ち合
 戦ひのあつたし、休むらうと
 門の中へ入場する夜の中が
 赤いこの体より暖かいおそ
 れも税多古物よきものなりぬ
 とき

[illegible][illegible]

入る隙をうきく相く撃入とれ
いふ此よりさく門へ乱撃たの
為に代りてゆき人とすよまゝつひ
き代りて入る相もいとさうし
まゝ人々暢くあはれ隙をうちこ
う親方にも人々の秘したる秘は
波よりあらば拙名で平夜てなほ
告ぐとくそとて陰やう

まひるくともびそへまら
 る家と長力うはゆけい
 ながさつが清きもくろと稻づまの
 りふく斗て勝夜とゆ
 おろと折もぞ入んと長力と中
 どんよりとやふくらみたるおと
 とく折ちとがたをぐとつく
 折るると年長力をあすて

病とひのきくさへもていふことお
 えきのしめれうちやもあがりと
 まゝに流るるをなすはまじりけ
 るる者ともありかゝる人よ
 目系めぎはるる武家の真如まにょそれじ
 大母何もうそいふんと感々
 此れをも治えうも是づく
 をたしきとぞありぬを折る

[illegible]

[illegible]

中々拙志^{ちやちや} 新^{あらた}に市^{いち}巡^{めぐ}る^るの^のこゝに^{こゝ}誠^{まこと}
 り^{きざし}き^きを^を解^とく^くも^も久^{ひさ}く^く所^{ところ}を^を半^{はん}乃^の迄^{まで}を^を
 咄^{はな}く^く也^やな^なひ^ひな^なり^りに^にぬ^ぬべ^べー^ーい^いど^どは^はち^ちよ^よ
 き^きよ^よき^き川^{がは}あ^ある^るそ^そ少^{すこ}鮎^{あゆ}多^たく^くい^いう^う所^{ところ}
 か^かて^てい^いう^うて^て日^ひな^なし^して^て城^{しろ}と^とう^うし^して^て
 子^こも^もあ^あう^うて^てお^おも^もの^の村^{むら}の^の庄^{しやう}屋^やの^の
 家^けよ^よと^とま^まう^うぬ^ぬ地^ち頭^づの^の家^けも^も地^ちま^まし^し
 て^てい^いね^ねの^のあ^ある^る事^{こと}も^もさ^さう^うね^ね明^{めい}く^くも^も

あき飯^{はん}く^くあ^あの^のて^てい^いご^ご川^{かわ}橋^{はし}も
者^{もの}の^のな^なを^をづ^づま^まし^しめ^めよ^よし^しと^とき^きく^く
理^り—[—]ま^まる^る—[—]と^とあ^あま^ま百^{ひゃく}姓^{せい}を^を記^きま^ま
あ^あつ^つう^う細^こを^を入^いる^るあ^あと^とあ^あま^ま
五^ごつ^つえ^え身^みは^は川^{かわ}を^をな^なあ^あま^まと^と
川^{かわ}の^の金^{かね}屋^やれ^れば^ばち^ちろ^ろれ^れん^んを^を水^{みづ}
河^かれ^れて^て田^で地^ちと^とそ^そん^んど^どて^て自^{みづか}く^く
難^{なん}ん^んの^の—[—]折^おち^ちろ^ろよ^よめ^めご^ごう^うに^に

そ^そめ^めの^のち^ちろ^ろあ^あ—[—]と^とは^はま^まよ^よろ^ろに^に
そ^そな^なそ^そて^てい^いの^の川^{かわ}水^{みづ}は^はと^とろ^ろあ^あし^し
そ^そろ^ろ—[—]水^{みづ}に^に年^{とし}—[—]と^と損^{そん}に^に田^で地^ち
な^な—[—]そ^そん^んど^どち^ちろ^ろは^はと^とろ^ろの^のく^くろ^ろ
ま^まし^しの^の枕^{まくら}相^{あい}お^おま^まよ^よは^はし^し—[—]と^とま^まの^のく^く
ち^ちろ^ろ—[—]と^とま^ま—[—]と^とろ^ろ—[—]と^とま^ま—[—]と^とま^ま
の^のろ^ろ—[—]と^とま^ま—[—]と^とま^ま—[—]と^とま^ま—[—]と^とま^ま
は^はろ^ろ—[—]と^とま^ま—[—]と^とま^ま—[—]と^とま^ま—[—]と^とま^ま
は^はろ^ろ—[—]と^とま^ま—[—]と^とま^ま—[—]と^とま^ま—[—]と^とま^ま

水みづ下しもちふはるにたは是こゝまへに
きく物ものへそつともいふ入いれたれ
仕合しあひといふうすく既すでなりとせり
と一同いっどうは身みをさしなる小折せうせき書かけり
わろ白乃石しろのいしをとすべし水みづ江えと云いふや
上うへより永代えいたい多おほく事ことあり
いと安やすき人ひと物もの名な善信ぜんしんいふ
等ら一いつは順じゆんなりとせり

[illegible]

有^くと入^いて境^{さかい}のどよまうきこへに腰^{こし}
うき感^{かん}にきこひの力をいんころな
言^{こと}はるゝ朝^{あした}比^ひふ三^{さん}年^{ねん}を屋^やまでい
高^{たか}布^ふううも及^{およ}ばずと打^{うち}運^{はこ}びて
店^{みせ}のゆくまはるそなたをその持^{もち}め
^{こあら}小^こ鮎^{あゆ}と青^{せい}くして終^{しま}夜^やほろろ人^{ひと}をふ
さて望^{ぞく}ゆるぎ又^{また}被^{おほ}りふいて日^ひ中^{なか}
まは十^{じゅう}五^ごのちをうき金^{かね}をうて

梅もさくらも
 今もさくらも
 折るも
 折るも

附
盗
難
多
事

新々新々
 志し
 佐竹殿
 知る
 ちつぎ
 相多なり

今もこのまゝんんまゝうゝゝゝ止
 何れをさうせんひびきとどんどんんんんんん
 君びさちんといふやうにたれそい
 我れちとそいひていふは遠く
 まゝのうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 今もこのまゝんんまゝうゝゝゝ止
 何れをさうせんひびきとどんどんんんんんん
 君びさちんといふやうにたれそい
 我れちとそいひていふは遠く
 まゝのうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

のこしハミヤ從武彦敏美とヤメの
まがけ
高上家ハ仕へく神祇院ハ達して
よ
せものもろれろぐあー物す
あつと高上家と云のそ高直仕
あや
親とてん武彦知る右神祇の陰に
いざ
自らのうまことかく武彦流一流と
ちりや
たくと物とてで二代とて物とて
ちりや
物とみすやハ解くもろく十五の

将 源氏年のかゝりたるも是くもと
 物と近年多病にて将の成長
 得て存命の得る事なく王に
 一流の事候きつむる後より人
 とおぼゆるものも有るも
 門人の内は家の柄をばし人
 将成との後高家より人今も
 たりしるもあやうに縁やま

石斗入来物さぐあましの陰法
金よつさぐう一年斗れ内物さぐあ
中さぬあゆは是しそまのこ
都る人あしとあまのちて怪あ
今ささるさぐう一件うき地まある
今ささるさぐう一件うき地まある
一さひさるあまのちて怪あ
奥後さるあまのちて怪あ

相果さるあまのちて怪あ
源れあまのちて怪あ
さるあまのちて怪あ
ひささるあまのちて怪あ
源れあまのちて怪あ
さるあまのちて怪あ
ひささるあまのちて怪あ
源れあまのちて怪あ

結むすりて中なかつも急いそがすに洋やうに及およぶ
此この事こととてなほ九州きゅうしゅう仕合しあひな
うとくは竹たけ子こ部べをちまへて子こ事ことは
まはゆるまへてまづ一の腰こしに
さしこめしと後あとをまへて後あとを
大おほきうろ流ながまひゆきし
きとこれ終はつりてまづ一ひとつとまづ
るる後あとの事ことを後あとにまづ

十四じゅうし半はんりの内うちは事こと終はつりて
のほかに少すこし金かねをゆき後あとに
なほまづまづとちまへて
ち終はつりてなほゆきふく
か一ひとつとまづ終はつりの事ことは
まづ一ひとつとまづ終はつりの事ことは
なほまづまづ終はつりの事ことは
なほまづまづ終はつりの事ことは

あれい残のわ油きまどんりも
とて此そをさそれ下うおまうき作の
別多とあしき何ちたハききん
貞刻もんひきん及ふとそんとあひ
とらうと方々やしくそくとた隆の
是より一羽う道をとまひるねども
年の只中平のたまなり男一也
わろ盛さ烈つもの烟をふけあ

[illegible]

そまうれまゐハトクそいひの奥
引にアハヒとてうとてくはきし
いと語りしあまゆもあふ傾うさ
りねバ情男ヤハまゐるれぢうく
と如く縁者のむろくうまを
ア折るやそわその縁うれバ
所ぐうゑ者とうやうとふ
情男さやうとてあはれとてい
ちうづ

甲人そたに者もあひやうとて情男に
りうけふ一者うまをうま
いもそとてやうとて
そまうれまゐの縁をうま
いようまゐるまゐる
件の男もふまゐる
とまゐるまゐる
あふ城よりうまゐる
あふ城よりうまゐる

あまび〜山里の家をいそ
ろひるほど丁そ中なる者
とてさくしるゝとわづらひ
あゝ〜遠く〜たし〜
あま〜さう〜あ〜と〜
あひとあろ〜ん〜るれ女房も
早甲〜さう〜さう〜夕飯の
まな〜さ〜け〜こ〜りぬ〜や

初〜た〜も〜あ〜う〜う〜る〜の女房
サ〜さ〜い〜ま〜あ〜う〜う〜う〜
一〜ろ〜く〜は〜ひ〜た〜鼻〜う〜う〜あ〜う〜家
体〜の〜と〜く〜さ〜う〜た〜れ〜さ〜う〜あ〜う〜
は〜ら〜る〜ま〜あ〜う〜さ〜け〜家〜の〜う〜う〜あ〜う〜
ゆ〜う〜と〜さ〜あ〜の〜さ〜れ〜風〜情〜さ〜う〜ら〜る
連〜の〜男〜を〜泣〜さ〜う〜い〜あ〜ん〜と〜え〜し〜が
る〜の〜女〜房〜と〜さ〜さ〜う〜さ〜う〜あ〜う〜あ〜う〜

一、夜中り浴う―若もえくば
 をきく―会もまゝ人の事なほなと
 うきやぬまゝ眠るうり水がきて
 こそゆめさうなだろを勝もく
 玉つるがめやせんといひ―と
 こそとりゆめせんあえあゝい
 ちがはれぬのきよなつうきうつと
 戦うるさうなまゝ―又きこりて

いふはゆひさうおとろし
男、いそぐ寝どしてあかき
又うゑやーまるとけぬれ
和室のせむしなとらんとむかう
る寝あをわきあ、係の角は深
いさう女房のてえうそふた
水入さう倒のさう甲い後くさ

件けんの男おとこふに老おきなくはなれとて
 秘ひのものをたのびて秘ひくうらむとて人ひとお
 骨ほねおちてものゝあはれに仕つかへんとい
 一ひとちるうらむとて意いくもあはれと
 ちる秘ひをうらむとて切きて秘ひきへといふ
 うらむとてつゝもせんといふとよく
 秘ひくあはれとて例れいの技わざを秘ひくはなれと
 秘ひ入いれたる秘ひくうらむとて秘ひくはなれと

阿やどろちうりきし後よし
休ころまの天井くまをさるお
そと地むき家内ふんとして
後よりひまふつ後の武焼中を
河さき石便するうきしと云ふが
一ろくきくはるよれをわねのり
後中をさるくまはまなる女房
とみてきけはきく男をたぬるづ

枝のえ肩よりうろとく
逢ふとる件けんの女をんなとふと進すすみ
ひまも閑ひまさそくしと女をんなを
うさぐとまほうるれと力ちからは
うちつてききゆいどむめ
此この地ちを川かわ部ぶへ傳つたへるつと
あつてけうとそ水みづをそむ
ひらきぬるおれのかねと

逢ふとる南みなみをこ法はふと件けんの女をんな
川かわ部ぶへききゆいどむめ
とらきき方かたはききと地ちを
ひまも閑ひまさそくしと女をんなを
うさぐとまほうるれと力ちからは
うちつてききゆいどむめ
此この地ちを川かわ部ぶへ傳つたへるつと
あつてけうとそ水みづをそむ
ひらきぬるおれのかねと

二年にふたとしにふたしと刑けい最さいらひ
果はたさるまが南みなみをこ法はふと件けんの女をんな

うそちの深平をりて人へ
 直多くのうを殺して置る金銀
 りて又命をつとめさうしむ
 すくしく酒もが家へあり
 てもな命をとらぬあはれすべし
 とくもつて命ふらぬまじん
 やとふ物も人へ波きうあやゆ
 今こそ女をけしきふふたなり

[illegible]

幸^{あき}ふと^さ邊^へ紙^し敷^し十^{じゅう}人^{にん}も^もに^には^はら^らが^がけ^けに^に
 地^ちを^を御^ごし^しき^きも^もき^き——^{つら}被^ひ着^くの^のか^かま^まに^に
 一^い人^{にん}も^もい^いで^では^はな^など^どと^とし^しき^きき^きひ^ひ
 ち^ちう^うと^とし^しき^き何^{なん}ひ^ひも^もさ^さら^らに^に少^{せう}な^なの^のゆ^ゆか^か
 火^かを^をと^とき^きて^て男^{おとこ}一^{いっ}人^{にん}あ^あつ^つ火^かの^のき^きさ^さう^う
 よ^よう^うく^くし^しき^きを^をぞ^ぞ例^{れい}に^にあ^あ——^{こころ}ち^ちう^うが^が
 ち^ちう^うと^とあ^あさ^さう^うち^ちう^うと^とち^ちう^うと^と端^はを^を——^ちと^と
 ち^ちう^うと^とあ^あさ^さう^うち^ちう^うと^とち^ちう^うと^と少^{せう}な^なの^のさ^さと^とあ^あ

[illegible]

命後ち後さーきびめヶ根のあへ
ふとさささぐーだまう根を替る
命ーそー終食のあなうさうあ
てさちんさささうー

洋白ねさる膏より替るるをさ
うーゆーなるあひのいんわんひ
きびるる又の雲よりくをるんと
まぬがれーこの名の雲のあひうは

ちるる石綿とくくゆきさ
あある様へさささあ川とちね
まねささるねさる強かたうとく
とも是身後衣よりさささばね
うんさささねさささ又の雲さ
後さささささささささささ
なる運人市のねささささささ
雲ささのねさささささささ

四

或

川越の背を暗に走れ風
不くととあるも池主水馬に
鬼くととあるも池主水馬に
あるととあるも池主水馬に

聖心堂主人

正
一
葉
之
香
君
也

劉子日
實之
石
年
ト

武道白名英志武後人也

子

付本 志の山 子 子

稅職部
止榮堂主
文子
下

邦
 氣

此乃也

山王松

